

### 1 自己評価及び外部評価結果

【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	4372700932		
法人名	社会福祉法人 成仁会		
事業所名	グループホーム みどり		
所在地	熊本県阿蘇郡西原村布田 845		
自己評価作成日	H26年12月10日	評価結果市町村受理日	平成27年1月7日

※事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。(↓このURLをクリック)

基本情報リンク先	<a href="http://search.kaigo-kouhyou-kumamoto.jp/kaigosip/Top.do">http://search.kaigo-kouhyou-kumamoto.jp/kaigosip/Top.do</a>
----------	---

【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	特定非営利活動法人 あすなろ福祉サービス評価機構		
所在地	熊本市南熊本三丁目13-12-205号		
訪問調査日	平成26年12月10日		

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

広報誌「しあわせがいっぱい」は家族、地域に好評である。職員が入居者と楽しく生活する為の工夫と視点がある。喜びを共有することができる。職員は常に笑顔で入居者、家族とコミュニケーションがとれている。法人内の情報共有もスムーズにでき、相互交流が出来る。職員は役職、資格にとらわれず業務が出来、問題意識を持ち意見を述べる事が出来る。入居者は退去後の不安感が解消できるように支援体制がある。新規入居にあたっては本人と家族と信頼関係が早期に出来るよう対応している。

【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

開設から10年を迎えたホームは、母体施設の増床などにより散歩コースやホーム周りの雰囲気は変化したものの、職員の温かな支援や手入れが行き届き変わらぬ木目の空間が安心感を与えている。昼食後、二人の男性入居者は、どちらが誘うわけでもなくソファに座り、足や腕を組んでいつもの時間と言わんばかりの姿が実に微笑ましい光景であった。また、エプロン姿で来評者に率先して声をかけて下さる方や、広告を置いて「チキンやドーナツを食べたかね〜！」など、我が家にいるような会話がホームの日常を表している。手作りにこだわった広報誌『しあわせがいっぱい』は、この12月で150号の発行となるなど、職員の思いが継続された温もりある便りは家族の信頼を更に深めている。また、「今日のきょうでも出かけられる外出」に取り組み、要望や天候が良ければ早急に対応したいとする、職員のチームワークやフットワークが今後も入居者に笑顔をもたらしていくことであろうと大いに期待したい。

V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1~55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項 目		取 り 組 みの 成 果 ↓該当するものに○印	項 目	取 り 組 みの 成 果 ↓該当するものに○印
56	職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:23,24,25)	○ 1. ほぼ全ての利用者の 2. 利用者の2/3くらい 3. 利用者の1/3くらい 4. ほとんど掴んでいない	63	職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている (参考項目:9,10,19)
57	利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:18,38)	○ 1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない	64	通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,20)
58	利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:38)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	65	運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが拡がり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)
59	利用者は、職員が支援することで生き生きとした表情や姿がみられている (参考項目:36,37)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	66	職員は、生き活きと働けている (参考項目:11,12)
60	利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:49)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	67	職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う
61	利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごせている (参考項目:30,31)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	68	職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う
62	利用者は、その時々状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らしている (参考項目:28)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない		

自己評価および外部評価結果

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
<b>I.理念に基づく運営</b>					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	ホーム内のケアにとどまらず、地域への貢献、信頼されるホーム作りを目指し、ガラス張りの運営を目標に実践している。	開設時から法人の運営方針とともにホーム独自に“人間としての尊厳と家庭的な雰囲気”で入居者の個性を活かし安心した暮らしを支えること”を理念として掲げている。入居者と職員と一緒に生活する場としてホームを位置づけ、職員の入れ替わりもあり理念や目標を説明している。全体会議の中で施設の考え方を発信し、ホーム長はホームとしての考え方や入居者支援についてカンファレンス時に指導している。家族にもパンフレット等を用い啓発に努めている。	法人として“みどり便り”の配布や、秋祭り等村内全戸に周知を図ることで足を向けてもらう等ガラス張りの運営体制としている。平成14年開設以来のホーム理念であり、入居者の現状や家族等の考え方等も踏まえ、理念の見直しを検討されることを期待したい。
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	従来の行事を通して今迄通りの交流がある。今年も9月に敬老・秋祭りを開催し、法人全体と地域参加のイベントを実施した。	周辺には民家は少ないという立地にあり、ホームから地域に出て住民との交流に努めている。老人会や近くの企業が主催する運動会には毎回招待され、入居者の出番の機会もあり、村の老人スポーツ大会では知人との交流も行われている。地域の一員として区費の支払いや、保育園児の慰問や中学生の職場体験の受け入れ、顔見知りの訪問による交流を行っている。しかし、地元住民の立ち寄りはまだまだと認識し、行政と話し合いながら、ボランティア等の受入れが検討されている。	母体の特養との連携した行事では地域住民の多くの参加もあり、更に地元住民が気軽に立ち寄れる環境について、全員で再考されることを期待したい。
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	家族会、毎月発行の新聞等で、情報を発信している。また、GHを実際に見学してもらい理解してもらえるようにPRをしている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	2か月に1度、行政・老人会・民生委員・ご家族代表に案内文を出しみどりの館地域密着型ユニットと合同で行っている。入居者の方も参加され意見が反映されている。	家族会の中で運営推進会議について検討し、再スタートさせている。行政や老人会・民生委員及び家族代表・利用者等も参加があり、質疑応答や意見交換を行っている。また、役場からの参加は家族等が直接行政担当者と話をする機会として生かされ、役場や民生委員・老人会長には議事録を送付し、家族には家族会の中で報告することとしている。	今年6月より再開したばかりであり、報告が中心であり意見は少ないとのことである。日程も調整中であり、会を重ねることで、意見等も出るものと思われる。議題などを提示しながら話し合うことを検討され、年6回の開催に向けた取り組みに期待したい。
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くよう取り組んでいる	村内行事に参加し協力関係が築けるようにしている。	ホーム長は事ある毎に役場に出向き制度上の確認を行ったり、役場担当部署とのメールによる意見交換や福祉計画の策定委員及び地域包括支援センターの運営委員として参画する等行政に関わっている。	
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者および全ての職員が「介指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	徘徊で落ち着かれない時は一時的に施錠を行うが時間的ロックで対応できている。	法人全体での研修、ホームでのスタッフ会議や身体拘束廃止委員会での事例検討等を行っており、拘束の弊害は全員が正しく認識している。在宅時の動きを把握する等個々の状況を把握し、興奮気味にドライブや買い物・散歩等個別支援に努めている。朝・夕等の職員の手薄時間には一時的な施錠をしたこともある。職員には抑制する言葉“だめよ、待って”を使用しないよう指導する他、職員同士も注意喚起している。	
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	内部職員体制お互い注意し合える職場風土作りに努めている。		
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	学習機会は少ない。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	入居前の説明はもちろんの事、退居にあたっては、不安がないよう十分な説明と今後の対応について説明するようにしている。		
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	家族会、面会時の近況報告などで職員全員に話し易い様な雰囲気作りを行っている。	入居者との職員との良好な関係が出来ており、「食いたい、行きたい」等職員が聞き取り、希望を叶えている。家族には訪問時に状況等を報告する中で聞き取りし、面会が少なくなると家族に連絡し訪問を促している。家族会時には事業報告や計画を説明し、意見交換を行っている。ホームへの苦情は無いものの、問題発生時には苦情処理第三者評価委員会の中で精査することとしている。	職員の変更もあり、写真等により職員紹介を掲示することを検討いただきたい。職員の名前を明示することで、更に家族との親近感や密接な関係として生かされることを期待したい。
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	毎月のミーティングで意見を出しやすい関係が出来ている。	日々主任は職員とのコミュニケーションを図り、ケア等全員で話し合いながらケアサービスに反映させている。ホーム長と相談しながら入居者の受診及び物品・勤務運営状況等体制を整えている。また、ホーム長参加による毎月のミーティング等職員が意見や提案を出す機会を作り、主任も職員との面談を行う等風通しの良い関係を作っている。	
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	法人全体に人事評価があり本人と上司が評価する仕組みがある。残業を減らす有給取得に努めている。資格取得に対する補助仕組みがある。		
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	事業所内の勉強会の他、法人全体で勉強会を実施。外部研修の機会がある時には、研修扱いとし、順次職員を出せるようにしている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	県、阿蘇ブロック会を通して、連絡、勉強会等の交流を図っている。その中で、事業所間の相互学習や訪問の機会を作るようしている。		
<b>Ⅱ.安心と信頼に向けた関係づくりと支援</b>					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	入居までには、必ず数回の面接を行い、本人の意見や思いを聞きだせるよう努めている。又、初期ケアプランにも反映できるようにしている。		
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	入居に至るまでに行う面接の中で家族の意見も十分参考にしている。アセスメント作成には家族にも手伝って頂き必要なものは初期プランにも反映出来るようにしている。		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	管理者と企画作成担当者が一緒に面談を行い現状の確認とその時の一番必要な支援を提案出来るようにしている。		
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	家庭的な雰囲気の中で、共に暮らし支えあう関係を心がけている。		
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	日頃の面会時と年2回のカンファレンスに参加して頂くことでコミュニケーションを密にし家族からの信頼をもとに支援していくようにしている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	家族の協力で故郷訪問時の同行実施や地元の知人の訪問、地域行事への参加を支援している。	村内の美容室を継続して利用する方や家での受け入れ等の協力により仏壇参りや墓参等を継続している。50回忌参列、故郷訪問として里帰り時に観音様参りを実現させたり、天草出身に三角までの外出等これまでの関わりが途切れないよう支援している。仲良し3人組での外出等入居者同士も馴染みの関係性にある。	
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずに利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	入居者同士の場の雰囲気作りには努めているが、全て職員が介入するのではなく入居者にできる力があれば、利用者同士の支えあいを見守ることもある。		
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	以前入居されていた入居者の訪問がある。併設の特養に異動された場合ケアプランを含めた情報の提供を行っている。交流を継続する為、今年も敬老・秋祭りを合同で行った。		

### Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント

23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	日頃の言動や暮らしぶりから本人の意向や希望を把握し、必要であればケアカンファレンス、ケアプランを活用し支援するようにしている。馴染み美容院でパーマをかけたいという思いに出掛けている。	職員は五感を使って、いつもとの違いやサインを見逃さないケアに徹し、日々の会話の中で出る思いを推察したり、「美味しいものを食べたい、〇〇に行きたい、痛い、きつい、今日は寝て過ごす」等職員に直接申し出る方もあり、カンファレンスで検討し、出来る限りは思いを実現させている。	
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	入居の際は本人や家族、施設担当者から情報を得るようにし、アセスメント用紙を活用することでより深い情報を把握することができるよう努めている。		
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	個人の有する能力等の現状はアセスメントを使って把握するようにし、ケアカンファレンスや申し送りノートを活用し、職員間の相互理解に努めている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	三ヶ月に一回のモニタリングの他、六ヶ月に一回のケアカンファレンスで職員間の意見を集約。半年に一度は家族、本人も交えカンファレンスチームとしての意見がケアプランに反映できるようにしている。	毎月のカンファレス、3ヶ月毎のモニタリングによりプランを追記している。半年毎にアセスメントも取り直し、家族も交えたカンファレンスを開催しており、本人の望む暮らしや家族の思い及びケアマネジャーが“できるADL・しているADL”等詳細に把握し、新たなプランを作成している。病状悪化や急変も有りうるとして、今を楽しむことをプラン化する等職員の思いもプランの中に反映させている。	
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	ケース記録や申し送りノート、ケアカンファレンスの活用により情報の共有に努めている。また、モニタリング、ミーティングを活用している。		
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	ご家族の面会やサービス担当者会議などを通し、意見や要望を取り入れている。又、外部評価アンケートを参考にしている。新規サービスが必要になった場合、法人全体で検討するしくみがある。		
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	法人内の人的、物的、環境面の資源については広く活用、協働できている。現状の地域、社会資源のみでなく、新しく、資源の掘り起こしをしていくことが課題である。		
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	本人や家族の希望等、必要性があれば以前からのかかりつけ医の受診を支援している。又、協力医療機関との連絡を密にし、適時、適切な医療を受けられるよう支援している。	入居時に原則として協力医をかかりつけとして健康管理にあたっている事を伝え、了承のもと月1回の往診や年1回の健康診断が行われている。また、隣接施設の往診日にも医師がホームを訪れ、適宜健康指導や職員の相談に応じている。協力医以外の受診については基本的に家族の同行としているが、困難な場合はホームでも対応している。日々のバイタルは記録に残す他、月1回の体重測定を行い、コントロールが必要な場合は、医師と相談し主食量の調整などが行われている。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	定期的に行われる回診時には現状を伝え法人内の看護師と連携できるようにしている。特変時等は早急に報告し受診の有無の指示を受けている。		
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	入院時はサマリーを使用し、本人の認知面や行動状況について申し送りを徹底している。入院中も面会を多くし、本人の不安を減らすと共に、病院のスタッフと関係作りができるように努めている。		
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所でできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	入居期間が長くなり、入居者の高齢化、重度化と共に、カンファレンスの際に家族の意向を必ず聞き取りするようにしている。又、特養相談員、看護師等との情報提供、チーム体制をつくり対応している。	グループホームの機能を維持するためとして、開設時方針を定め、車椅子やホームでの入浴支援が可能なまでを目安として終末期支援は行われていない。また、入居時にその旨を家族へ説明し、母体特養施設への申し込みを依頼している。重度化しても特養に入居が決定するまでは、ホームで対応していくので安心して欲しい事を申し添えている。アセスメント時には、家族には尋ねにくいこととして思いにも配慮しながら、救急時に必要な事項として延命への希望を確認している。	
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	急変事のマニュアルを作成し、特養との連携で急変事に備えている。又、年一回担当消防署から来てもらい救急蘇生法の訓練を実施している。		
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	防火管理者を配置し、火災や災害時の避難経路などの確保と、防火点検、隣接特養と合同で年2回の防火訓練とスタッフが自主的に行う防火訓練を行っている。	年二回(6・12月)火災総合訓練を母体特養と合同で開催する他、新人職員研修として通報訓練などホーム単独で行っている。訓練に地域住民の参加は得られていないが、地元消防団による避難経路の確認など支援が行われ、母体施設も福祉避難所として地域貢献を図り、日々の安全点検など職員は意識を持って業務にあたっている。	今後も有事の際に備え近隣者へ協力を依頼したり、地震や噴火など自然災害についても対応を検討されることに期待したい。



自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
<b>IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援</b>					
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	プライバシー保護の為、排泄時、入浴時など一人ずつケアを行っている。又、声掛けも耳元で行っている。	入居者の尊厳や家庭的な環境の中での暮らしに取り組んでおり、職員は理念を共有しながら日々の支援にあたっている。ホーム長は入居者に応じた支援及び排泄時の声かけや誘導等職員の気配り・気づきあるケアであると評価している。広報誌など個人情報の使用にあたっては家族の承諾を得、守秘義務の周知徹底については研修会や会議の中で指導が行われている。	
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	週に二度ある自主メニューで食べたい物の希望に添えるように作っている。又、入居者の方にも調理に参加していただいている。衣類の選択も可能な限り本人にしている。		
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	入居者になにか希望がある時は、話を聞いて都度対応を行っている。		
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	季節に応じた好みの服を着れるように、支援している。起床後や入浴後、居室洗面台にて整容されている。		
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	新入居者の意欲的な意見を取り入れた献立を取り入れている。出来る作業は少ないが、コミュニケーションをとりながら楽しく調理できるように支援している。個別ケアとして全員の方に希望の夕食を楽しんで頂いている。	行事食や自主メニューの取り入れをはじめ、新しく入居された方には「今までどんな物が好きでしたか？」など、好物の料理を尋ね、食事が楽しみになるようにしている。餅つきや梅干し作りなど入居者の経験を生かした食への関わりや、下膳や台ふきなど積極的に取り組まれる方もおられる。また、個別支援での夕食やイルミネーション見学後は忘年会として、仕出し弁当を頂くなどホーム調理以外の食事を楽しむ機会も設けられている。その日の担当者によって作られた料理を職員も一緒に食べることで、会話も弾み思いも共有されている。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	本人の状態に合わせて水分量不足気味なときは、チェックをし必要分摂取していただいている。又、本人の嗜好を大切にし、お祝いや行事、普通の食事のメニューに聞き取りをし、取り入れている。		
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	毎食後、口腔ケア、義歯洗浄を行い口腔清潔に努めている。可能な限り自力にて行っている。舌磨きも行っている。必要時、歯科と連携している。		
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	本人の排泄パターンに合わせ、排泄チェック表を活用しながら、本人にあった方法で支援している。極力、普通の下着を使ってもらっているようにしている。	入居者は居室近くの使い慣れたトイレを使用しており、日中は布下着や尿とりの併用など、チェック表を活用した支援が行われている。夜間もトイレやポータブルなど安眠や安全に配慮しながら対応している。トイレ内の鏡に不穏になられる方には、紙で覆うなど安心して使用されるように最良の方法について検討を重ねている。	
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	年齢と共に排便コントロールが難しくなっており、下剤に頼るのではなく職員会議等を通し検討。個々に応じ、乳製品などで対応している。		
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めず、個々にそった支援をしている	グループホームでは、一人ひとりがいつでも入浴できるよう、体制を整えている。個々の気持ちを第1にくつろいだ気分で入浴して頂いている。毎月26日を風呂の日として楽しんで頂いている。	入浴は午後からを中心に支援しており、毎日や2・3日に1回など個々の希望や体調によって対応しているが、着替えは毎日行われている。風呂の日を設け入浴剤の使用や差し入れの菖蒲や柚子を使った季節風呂に取り組んでおり、シャンプーやリンスは個人用で準備され、脱衣所に保管されている。職員は今後も入居者がゆっくりとした日々の入浴の時間を大切にしていきたい意向である。	洗面台は入居者が入浴の前後に自身を確認する場でもあり、今後はスッキリと整頓されることが望ましいと思われる。

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	睡眠の際は清潔な寝具を使っていただけるよう定期的に洗濯、交換したものを使用。日中ソファなどを活用し、リラックスできる環境づくりを心がけている。		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	カルテに記入してある「くすりの説明書」をスタッフは必ず読んで内服薬を把握。一日分ずつセットし、毎食時、眠前と確認し、確実に内服行っている。内服に変更あれば記録し、申し出る。		
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	一人ひとりの意思を尊重、又、能力に合わせて、茶碗洗いや、洗濯物たたみなど、ケアプランと連動し行っていたいっている。		
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	季節感を味わえる行事、ドライブへの外出は実施している。又、地域のイベント事へも参加している。	阿蘇の麓という環境から四季を感じながら敷地内の散歩はもとより、地域資源(高原・牧場・花畑・イルミネーションなど)を活かした外出が行われている。また、故郷訪問や家族が愛犬のシャンプーに出かける際は同行しドライブをされる方や、外食や買い物など、家族の協力も確認され個別支援の充実も図られている。仲良し三人組での笑顔のスリーショットや念願だった行きつけのデパートでの買い物の様子等広報誌の中で紹介されている。	この一年も「今日の今日でも出かけられるようにしている！」と、ホーム長が語るように計画的な外出に限らず職員チームワークで多くの外出支援が行われている。年明けには天草への個別外出も企画されており、今後も家族・地域の協力も得ながら外出の機会が支援される事に期待したい。
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	個人の金銭所持が理想だが現状は難しく実践できていない。買い物等の際に支払いを一緒にすることなどで実感してもらっている。		
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	本人の要望がある場合は、家族へ連絡を入れ、本人が家族と直接話を出来るよう支援している。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	常に環境整備に努め、清潔感のあるリビングになるよう工夫している。季節の花や道具を使い、季節感が出るようにしている。	行事計画に装飾という項目を設け、季節の飾り物(鯉のぼり・兜、クリスマスツリーなど)が準備されている。また、ホーム長は飾る際の配置や位置について、入居者の目線に応じて行うことが指導されている。暖房使用に向けて加湿器やエアコンの掃除を実施することや清潔な空間作りに取り組んでいることは、記録物からも確認された。入居者も玄関先のガーデニングやリビングの掃除など、職員と一緒に楽しみながら環境整備が行われている。	広報誌の掲示や入居者に応じたテーブル配置など日頃の職員の取り組みが確認された。今後は注意書きとして貼られた文章について、職員間で見直しされることも必要と思われる。
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	共用空間には、間隔をあけてソファを設置し、気の合う仲間と思い思いの場所でくつろがれている。		
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かし、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	ご家族と相談の上で、本人の使い慣れた物を活かし、馴染みのある居心地の良い環境を心がけている。	居室入口には自分の書で名前を書かれた方や、トルペイント、紙粘土での表札が掲げられている。入居時にスペースに合う馴染みの物を持ち込んで欲しい事を伝える他、家族の了承のもと、職員は自宅を訪問し、本人が安心されるような品々を確認し、ホームへ運ぶなど個々に応じて支援している。家族が来訪した際は、居室も見てもらおうようにしており、衣替えも協力を依頼している。数名の方がテレビを持ち込まれているが、全て薄型のものであり職員は安定性にも十分注意を払っている。	
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	一人ひとりの身体機能に合わせた福祉用具を活用し、危険防止に努め、自分の力を生かし動けるように支援している		